

<「帰国婦人コース」カリキュラム開発のための状況分析調査報告書抄録>

1. 調査の概要

(1) 調査対象

調査対象者として、すでに日本に永住帰国した婦人（以後、帰国婦人と称する）の中から、帰国後1年前後の首都圏に住む5名と首都圏と比較するために地方に住む2名を選定

(2) 調査方法

- ・調査形態：サンプル数が限られていたので、調査に当たっては、量的処理に頼るアプローチはとらず、質を高めるために連絡、訪問を通じて接触性を高める面接法（半構成的面接）を採用した。
- ・媒介語：日本語
- ・訪問時間：2～3時間

(3) 調査項目：帰国後の生活状況を把握するため以下の項目を中心に調査することとした。

- ①現在の生活環境（住環境、近隣交際、サポートの実態等）
- ②日本語の使用状況
- ③生活全般についての本人の問題意識

(4) 研究設問

- ・帰国直後および現在の日本語能力・
- ・社会生活能力（健康状態、行動範囲と内容、交際範囲と内容）
- ・環境（住環境、サポートネットワーク、同伴呼び寄せ家族の状況）
- ・経済状態
- ・精神・心理的適応度（文化的帰属感、生き甲斐観など）

※詳細な面接記録（エスノグラフィーの手法採用）の中から研究設問に沿って、特に重要なポイントを項目整理すると共に、所見として指導の観点からの分析、解釈を加えた。

2. 分析結果のまとめ

① 日本語能力（会話力）

現段階では会話力に大きな問題はない。今回の調査では、永住帰国後1年前後を経過した時点での日本語力しか把握できなかった。仮に以前日本語力が後退していたとしても、言語能力の回復がかなり進んでいるといえる。特に聞き取り力の回復が早い。話す力について個人差があるが、その差がどうして生じたのか。終戦時の年齢や一時帰国歴との関係日本語力を維持するための条件の有無などいくつかの要因が考えられるが、中国語能力の客観的な評価とともに今後の研究課題である。
--

② 心身の健康状態

ケース5を除いては「比較的体調がよい」という声が多かった。年齢を考えれば当然、多少の支障はあるが、深刻な疾病や障害も無く、予想よりは健康状態がよいと言える。

③ 行動力

同伴呼び寄せ二世家族をサポートするために、その能力体力に応じた役割を担い、行動範囲を広げる傾向にある。

④ 近隣交際の状況

個々のケースに特有な事情もあるため、近所付き合いの一般的な傾向としては把握できないが、日本語でコミュニケーションが取れるので日本での付き合い方についてある程度理解できるよう。周囲との間にトラブルの発生等も感じていない。

⑤ 居住形態と経済状態

同伴二世家族のいる三つのケースは帰国後同居または準同居の状態である。その他のケースは公営住宅に独居もしくは夫婦二人で住み、生活保護を受給している。首都圏のケースでは呼び寄せ家族がいる場合、彼等を近在ないし近県に住まわせて互いの往来を確保している。

⑥ 自治体の公的援助等のサポートシステムの実態

本人自身の生活よりは二世家族の呼び寄せ問題や同伴・呼び寄せ家族の自立のためにサポートを必要としている。

⑦ 心理的適応度（日本文化への認識）

自己を日本人として意識している度合いは高いように感じられた。ただ日本文化の保持については、認知面、行動面、情緒面のレベルから十分な考察が必要で、初回の短時間の質問や観察からはいずれも断片的な印象を受けたにとどまり、結論付けることはできなかった。

⑧ その他学習への興味・関心、動機、態度

二世家族をサポートする立場として、特に就職や住宅探しに関する知識を必要とするケースがある。また自分自身の興味からも現在の日本の社会事情への学習動機が比較的に高いようだ。また（健康で二世の生活が安定すれば）老後の生きがいを得たいという欲求もあるようだ。